

Henry James 作 “The Ambassadors” 論

— 豊衍な想像力と繊細な感受性と「技術」が生む作品 —

梶 原 知 雄

I

批評家の多くが、James 後期の大作と推奨し、又、James 自身が自己の作品中最も完全なもの (*The New York Edition* の自序に¹⁾ 言っているように “quite the best, ‘all round’, of my production”) と認めた “The Ambassadors” (1903年) を今回はとりあげて考察するのであるが、この作品は James の多くの作品中最も難解なものの一つであると思う。故志賀勝教授が存命中筆者は二・三の質問をした時、この作品はむずかしいので、もう一度読みかえしてからと言われた事があったが、遂に先生の見解をきき得ないうちに他界されたのであった。筆者自身が James がこの作品を書いた頃と同年輩となり、今こうして思い出深い作品を論じようとしている。Fredrick C. Crews も “The Ambassadors” 論の最初に次のように述べている。即ち “It is a fact perhaps too well known that James’s later novels are not easy to read. If we approach them with anything less than the closest and most patient attention, or with an expectation of being entertained as Fielding and Dickens and Thackeray can entertain us, we shall neither understand nor enjoy them”. “the closest and most patient attention”²⁾ をもってこの作品を最後まで読みおわらぬかぎり、この作品の豊衍な想像力と繊細な感受性を感じることとはできないであろうし、James の創作方法からつくりだした人間の「心理」、直観と洞察力を傾けつくした人間の「心理」を読みとることはできないであろう。

先ず、この作品を読了していない読者のために、この作品の「主題」と「粗筋」とを書くことにしよう。この主題の生れる発端は James が、1898年10月31日、若い友人 Jonathan Sturges から聞いた話がもとになっている。James の覚書³⁾ によるのが最も正確であるから少し長いが次に引用する。

I was struck last evening with something that Jonathan Sturges, who has been staying here 10 days, mentioned to me: it was only 10 words, but I seemed, as usual, to catch a glimpse of a *sujet de nouvelle* in it. We were talking of W. D. H. and of his having seen him during a short and interrupted stay H. had made 18 months ago in Paris — called away — back to America, when he had just come — at the end of 10 days by the news of the death — or illness — of his father. He had scarcely been in Paris, ever, in former days, and he had come there to his domiciled and initiated son, who was not the Beaux Arts. Virtually in the evening, as it were, of life, it was all new to him: all, all. Sturges said he seemed sad — rather brooding; and I asked him what gave him (Sturges) that impression. Oh — somewhere — I forget, when I was with him — he laid his hand on my shoulder and said *à propos* of some remark of mine: “Oh, you are young, you are young — be glad of it: be glad of it and glad of it and *live*. Live all you can: it’s a mistake not to. It does so much matter what you do — but live.

This place makes it all come over me. I see it now. I haven't done so — and now I'm old. It's too late. It has gone past me — I've lost it. You have time. You are young. Live!"

Jonathan Sturgesに話したのは William Dean Howells であって、Howells は息子が Paris にいるので晩年息子に会いに来たのであるが、みるものすべて目新しい。Sturges に感慨深かそうに言う。「ああ、君は若い。君は若い。——それを喜びたまえ。そして生きてたまえ。できるだけ生きてたまえ。生きないということはまちがっている。君が何をするかは問題ではない。ただ生きるのだ。この土地は君が生きるのに満ち足りている。それを今さとりなさい。僕は今日まで生きてこなかった。——そして今既に老いている。もうおそ過ぎる。過ぎ去ってしまった。僕は今や生を失っている。だが君には時がある。君は若い。生きてたまえ！」

この話を聞いて James が小説にしない筈はないのである。感覚、感情、快樂という点では生きたとはいえない喪失感をいだいた一人の中年の男を主題として書こうという腹案ができた。James はこの主題をながい間あたためて、8年後の1903年にこの作品が創作された訳なのである。Lambert Strether (中年の主人公) が、その生国のアメリカの Massachusetts 州の Woollet に住んでいる未亡人の実業家 Mrs. Newsome に、Paris に行って帰国を促しても帰って来ない息子の Chadwick (以下 Chad と略す) を呼び戻しに行く役を依頼される。Liverpool に着くと旧友の Waymarsh が出迎えてくれる。Chad に、早速、会いに行くが、Chad は旅行に出ている。同宿の画学生のアメリカ人 Bilham から Chad の事について聞き予備知識を得る。Chad は Madame de Vionnet に大変愛されている。Strether は旅行から帰った Chad に Paris で会うと、Chad は以前とちがって教養のある洗練された青年となっていることがわかる。Strether は Paris に着いて以来、この旧世界のヨーロッパ生活を見て、新世界の人間が夢想さえできなかつた多くの貴いもののあることを発見し、その美点を嘆賞するに至るのである。鑑賞がいかに教養に欠くことので

きないものかを信じる。調和のとれた環境のなかで暮している Vionnet 夫人の魅力に惹かれる。Chad が帰国しない理由がはっきりわかり、このことを当然と考えるようになる。Chad をアメリカに連れもどすどころか、自分自身が遂に花の都 Paris にいすわることになる。一方、アメリカにいる Mrs. Newsome は Strether のにえきらぬ態度がもどかしく、第二の使者として、自分の娘とその夫 Mr. Pocock を Paris に立たせる。ところが Pocock 夫妻それに Pocock の妹 (the Pococks) は Paris に来ては、ただ地方的偏狭さをすべてに対して暴露するにおわってしまう。Strether は Chad は Vionnet 夫人の娘と恋愛関係にあるのだと最初は思っていたのであるが、それが Vionnet 夫人 (これも未亡人) と親密な間からであることが後になってわかる。自分も Vionnet 夫人に甚だ魅力を感じていながら、この事がわかった後も、Chad の事件を自分の事件として考察し、自分の体験とも考え、この事件で自分の生命の内容までが豊かになったものという考え方をとるのである。(この点 James 的である。) Strether は Vionnet 夫人を女神とも崇拜する。Chad は夫人があたえたものに値する男かどうかとさえ考えはじめる。けれども、Strether は決して花の Paris を讚美しているばかりではない。花やかな文化のなかに Paris は悲劇の影を宿していることも感じとるのである。又、Chad から飽かれようとしている Vionnet 夫人の苦悩をも感じとることができる。Strether は Chad と Vionnet 夫人との不純な関係をも知ることになり、同時に役目をはたしそこねたため Mrs. Newsome をも失うことになる。この役目をはたせば、New England で雑誌の編集している自分の事業に Mrs. Newsome から出資もしてもらえたであつたらう。Strether は Paris へ来て以来親切にしてくれた (ヨーロッパでアメリカ人のためのガイドのような仕事をしている) Maria Gostrey との結婚話の結末もつけず (自分の限度を知って、この結婚もことわるのであるが) Strether は Paris を去り行くのである。Chad は Vionnet 夫人をすてて帰国する。これがこの小説の粗筋である。

II

(I)において、“The Ambassadors”の主題(詳細には〔IV〕においてのべる)と粗筋とを紹介したが、この細微の情緒をもゆるかせにしない James の作品の面影を、いくらかでも読者に伝えたいと思うので(II)ではこの小説から(形式と内容両面から)少しばかり、この小説の動きの順序にしたがって、文章をひろい出して引用てみることにしよう。

この小説は、主人公 Lambert Strether が Liverpool に着くところからはじまる。そこで旧友の Waymarsh が出迎えてこの地のホテルに案内する。ヨーロッパに来てアメリカ人のガイドのような仕事をしている Miss Maria Gostrey に会い、この婦人の案内で Paris に行くのであるが、二人の会話で読者は、既に筆者が(I)で粗筋で書いたように、Strether が Paris に来たのは Mrs. Newsome の依頼を受けて、帰国をうながしても帰国しない夫人の息子 Chad を連れもどすためであることがわかるのである。先ず、旧友の Waymarsh とはどんな人物かという(小説では Strther のひきたて役としてあらわれるが)ヨーロッパの道徳的頹廢に対して「聖なる憤り」(the sacred rage)をいだきピューリタンの道徳を保持している人物である。James は、小説構成において、巧みに第二の使者 the Pockocks と同種人物として小説のはじめに出場させておくのであるが、共に大変かたくななピューリタンの人生観をもち、人生的価値のわかりにくい人物となっている。又、Chad の母である Mrs. Newsome も James の言葉で言えば、“a moral swell”(道徳的大立物)である。Strether が Paris に来て、Madame de Vionnet に会いその洗練された魅力(ヨーロッパ側の美点)にひかれるのに反して、Newsome 夫人は根本的に違った立場をとる。Vionnet 夫人を“such another”(あんなもの)と呼ぶ。

きて、Strether が Paris に着いて Chad の宿を訪ねに行く道すがら、あちこち散策して、二十五年前の Paris の記憶を呼びおこすところの描写と叙述は美しい。(この他の作品にも、この種

の美しさは随所に発見できるのである。一例をあげると「五十男の日記」“The Diary of a Man of Fifty”中の Italy の Florence の描写と思いの出の叙述の美しさ。) Strether は Paris に来ておいおい解放された気持になって行く。

“He wasn't there to dip, to consume — he was there to reconstruct. He wan't there for his own profit — not, that is, the direct; he was there on some chance of feeling the brush of wing of the stray spirit of youth. He felt it in fact; he had it beside him; the old arcade indeed, as his inner sense listened, gave out the faint sounds as from far off, of the wild waving of wings……”

Strether の心の耳には翼の物狂わしい羽ばたき、どこか遠くから微かな音をたててせまってくるようである。青春のさまよえる霊の翼のかおりを感じるとる機会もあればと今このパリーにいるのである。この引用文の前後の描写と叙述は美しい。

この小説は、Madame de Vionnetが登場するようになってからは更に興味も深まるし、又、夫人の描写には細微を尽そうとする。Mrs. Newsome と対照的に Vionnet 夫人の美質を描こうとする。Vionnet 夫人の外見描写を詳細にしているところは (Book Sixth) の III⁴⁾のはじめのところにある。

“Her bare shoulders and arms were white and beautiful; the materials of her dress, a mixture, as he supposed, of silk and cr. ape, were of a silvery grey so artfully composed as to give an impression of warm splendour;……”

肩と腕の色白の美しさを叙述する時も、その衣裳と関連して述べるのである。又、

“……and round her neck she wore a collar of large old emerald, the green note of which was more dimly repeated, at other points of her appeal, in embroidery, in enamel, in satin, in substances and texture vaguely rich.”

彼女の頸部の描写にあたっては、その周囲の色彩を叙することを忘れない。

“Her head, extremely fair and exquisitely festal, was like a happy fancy, a notion of the antique, of an old precious medal, some silver coin of the Renaissance……”

彼女の金髪が、「幸福な空想」ににているというのは甚だ James 的表現である。何か古美術ににたもの、ルネッサンス時代の銀貨ににたものを感じると言う。

“……her slim lightness and brightness, her gaiety, her expression, her decision, contributed to an effect that might have been felt by a poet as half mythological and half conventional.”

彼女は半ば現実のものとは思えないほど神話的であるが、又この世の女性でもある。神話的 (mythological) という語を用いているが、次の比喩や心像と照応するのである。即ち、

“He could have compared her to a goddess still partly engaged in a morning cloud, or to a sea-nymph waist-high in summer surge.”

なかば朝の雲につつまれている女神か、或は、夏の海の波に腰までつかっている海の精になぞらえることができると言う。そして、彼女の性格については Cleopatra ににているところがあると言い、更に、

“She had aspects, characters, nights — or had them at least, showed them by a mysterious law of her own, when in addition to everything she happened also to be a woman of genius. She was an obscure person, a muffled person one day, and a showy person, an uncovered person the next.”

この変現極まりない彼女の自己表現の描写ももしろい。或る日の彼女は、ほの暗く身をくるんでいるが、又或る日の彼女はあけすけと隠さない甚だ複雑で変化のある女性となるのである。

しかし、この Madame de Vionnet の美は、性格において頹廢的である。Strether は夫人の

背景に何かある栄光を、しかし、その栄光のほの暗い光沢と陰影を感じとるのである。夫人の家は、第一帝政時代の繁栄、ナポレオン時代の光彩の盛時を過ぎて、経済的には衰微しているのであり、又部屋に置かれてある美術品が、それを象徴するかのようであると思われる。それは過去の栄光の名残りであり、未来に向う生命力のある美ではないと感じる。夫人の美と魅力は過去のものであり、滅び行く精妙な、しかも、もの悲しいものなのである。

III

Strether の Paris における生活は、結局、実を結ばなかったように見える。Mrs. Newsome の愛情も、事業援助も失うことになる。又、Chad に Madame de Vionnet をすてないように説きふせることにも失敗をし、Miss Gostrey との新しく生れた友情をも満ち足りて続けることが Strether にはできなかったのである。一体、Strether の敏感な良心 (sensitive conscience) の価値とは何なのであろう。その答は Fleda⁵⁾ のように彼自身が芸術を創作したことになるのである。Strether は Paris 生活において自分自身の動機と目的を絶えず探求し、自分の行動を自分の洞察 (insight) の進展に順応させたことになるのである。従って、Strether の経験の評価は、James が「小説家」として期待できることに符合するのである。James は、作家というものは、どの事件をも、他人との関係において観察すべきだと信じていたのであり、そしてその意味において、「小説の形式」は道徳的判断の秩序だった連繋を提出すべきだと考えていたのである⁶⁾。

Strether がヨーロッパに着くとすぐ、ヨーロッパの生活に心ひかれる。ヨーロッパの美のいかなる形式に対しても、清教的背景による生活に慣れてきた Strether にとっては、それが醜悪ともみえ、又、非禁慾ともうつるのであるが、しかも、間もなく時が経つにつれて、“the pleasure of moment” の味がわかるようになる。これは、ヨーロッパ生活を鑑賞している Miss Gostrey の影響も大きいのである。Strether はヨーロッパ

を「見る」(see) ことができるようになる。従って、James はこの作品の序文に書いているように、“……so that the business of my tale and the march of my action, not to say the precious moral of everything, is just my demonstration of this process of vision” という作意でこの小説を書き進めるのである。この第一段階が、“the garden of Gloriani” の scene において、最高潮に達するのである。“the garden of Gloriani” において、それは垣間見るといった方があるいは適当かも知れない。いたってものわりのよい、如才ない社交の美に接するときである。年経た建物にめぐらされたこの庭園で、気のきいた意想を秩序よく語り、相互の気持をよくくみとって、無理なく自然に振舞う人人の社交の美にうたれるのである。最初は、Strether のこの社会における社交界の観察分析は単純であった。Chad の “manner” は Paris のおかげで向上したとみたのである。Madame de Vionnet の洗煉された技巧に幻惑されて、夫人と Chad との関係は “virtuous attachment” だと信じていたのである。

Strether は Paris と Woollett との二つの要求にたいしてバランスをとらねばならなかった。Strether はヨーロッパ文化とアメリカの “innocence” との衝突矛盾を解決しようとしてできるかぎり “Ambassador” としての自分の義務を細微にわたって研究してみようと努力するのである。Paris の生活を鑑賞して Paris に同化することは、Mrs. Newsome を欺くことになると心をくばったのである。遂に Strether は Paris をすてて Madame de Vionnet との交際を断つのであるが、Strether の一番大きな不安と懸念は「背徳」 (“a lapse from good faith”) であったのである。(この Strether の態度と決意は、いつもながら、甚だ James 的である。) 多くの批評家のなかには、このような遠慮と良心は余りにも洗煉され過ぎた態度だと批判を下すのである。このような遠慮深さと良心の咎めからおこる作中人物の行動は、いつも James 文学について問題点となるところである。

Stretherは何故に自らの生活を楽しむことがで

きなかったのであろうか？ 生活を楽しむことがどうして悪いことなのだろうか？ Strether はこう考えるのであろう。たとえば、自分が Paris 生活を楽しんだとしても Mrs. Newsome には何の影響もある筈はないだろうが、只、心に強く感じたことは Mrs. Newsome に対する義務 (obligation) の問題であったのである。又、Mrs. Newsome が Strether に期待した行動に関することであったのである。Strether が道徳美の理想をなしとげるためには、ヨーロッパの価値を鑑賞したいという慾望を満足さすよりも、Mrs. Newsome への約束に従って、自分の義務を果さねばならなかったのであろう。Strether はなし得ることは何でもしてみようとしていたのである。彼の心はあくまで明快 (lucid) で、常に澄んでいたからである。自らの情緒を、細微の情緒をも大切にし、その情緒のため自分も他人も欺くことなく、最後まで調和の理想をもちこたえようとしたのである。

Strether はある日、責任の重荷からのがれて、郊外に行き河畔を散歩していた。彼はここでもヨーロッパが彼に教えた「鑑賞」を味って、喜びの感覚に浸っていたのであった。その時、彼の目はあるものにとまった。一艘のボートが角を曲って静かに自分の方にすべってくる。一人の男と桃色の日傘をさした一人の女性が乗っていたのである。ボートはやがて凝視しているのをはばかりしていると考えられる位近くに流れてくる。顔をかくそうとして、日傘をあちこちにさし変えようとしているのは Madame de Vionnet その人であり背をこちらに向けている男性は Chad その人であった。さきに、Chad が Vionnet 夫人の娘とねんごろな関係にあると思ひ込んだ推測も、今は、はずれて、Chad と Vionnet 夫人との関係は “virtuous attachment” ではなかった事を知るのである。Strether はもう一度重荷をおわねばならなかった。Madame de Vionnet との最後の出会いにおいて、Strether は最早、彼女との幸福が可能ではあり得ないことをさとる。あのようなすばらしい夫人が、とるに足らぬ一人の男を大切にしなければならぬことのみじめさに心打たれるのである。Strether は夫人の優雅と高貴の

故に共にいることを楽しみとしたし、又、フランスの貴族の伝統を継ぐ最上の典型と思つた夫人が、今、余り値打ちのない一人の若者におのが愛を制御しかねている感傷的な中年の女としか目に入らぬことになつたのである。最早、Paris を去るべき時が来たのであつた。

IV

いよいよ、“The Ambassadors”に関する筆者の見解を述べる時が来たようだが、その前に、多くの批評家達のなかから数人をえらんで、その人達の見解と論評の要点にふれておこうと思うのである。先ず、この作品の形式と内容に着眼すべきであるが、この二者は、密接な相互関係をもつものであり、当然二者は優れた作品においては一致すべきものであることは論を俟たないところである。殊に、James の場合は、今日迄筆者が論述を重ねてきたように⁷⁾ 両者の相互関係が密接していて、内容(或は主題)が形式(或は手法)を決定するならば、形式も内容を決定するのである。しかも James の場合は、形式が内容を自分に合うように厳密に選定するといった方がよいかも知れない。

さて、この作品の主題であるが、それは、Strether が “an Ambassador” として、自分の使命を果す過程を語るのが主なる問題ではないということである。この作品を早い頃批評したものなかで、最も整つた批評をした人をあげるならば一人は Joseph Warren Beach⁸⁾ であり他の一人は Percy Labbock⁹⁾ である。Beach は “The Method of Henry James” の中で次のように論述している。“There is most obviously the particular problem of Chad Newsome, which forms the subject upon which the intelligence of Strether is perpetually exercised, and which determines the direction of all his “adventure”. Yet I should hardly call this the subject of the book: it is too particular, too limited in its *portée*. The subject proper is something more abstract: it is the matter of free intellectual exploration in general, or

the open mind in contrast to the mind closed and swaddled in prejudice and narrow views”. と述べ、又、“which makes it possible to say that the subject of this study is Paris. It is Paris that gives its particular tone and color to this work”. と述べ、更に、“The Ambassadors” 論の最後で “The tone of ‘The Ambassadors’ is accordingly the nearest we ever come to the very tone of Henry James. It is the tone of large and sociable speculation upon human nature, a tone at once grave and easy, light and easy, light and yet deep, earnest and yet free from anxiety. It is the tone, most of all, of the leisurely thinker, well of time. And what he offers us are fruits well ripened in the sun of his thought”. と結んでいる。この Beach のいう “tone” なるものは、明かに James の形式と内容との一致から生れ出るものであるということが出来る。

形式と内容の一致に努めた事は James が、小説の芸術家として示した特徴であり、小説芸術に寄与した特殊性は、何としても、その手法(形式)にあるのであり、多くの批評家もこの点を褒めるのである。その特殊性の重点は、James の読者が知る「視点」(point of view) の設定ということである。James は常に視点の限定という手法に合致するよう主題(内容)を探索したのである。しかも、この作品では特に Strether の役割は使者であるが、その使命を成しとげる為には先ず、「見る」(to see) ことである。見て意識し、そして判断することである。

次に James を称讃するもう一人の批評家、Labbock の評言に耳を傾けてみよう。“Strether in particular, with a mind working so diligently upon every grain of his experience, is a most luminous painter of the world in which he moves — a small circle, but nothing in it escapes him, and he imparts his summary of a thousand matters to the reader:……” James は心の描写が完全に劇化される手法をとるのである。Labbock は次のように言う。“Just as the writer of a play embodies his subject

in visible action and audible speech, so the novelist, dealing with a situation like Stretcher's represents it by means of the movement that frickers over the surface of his mind. The impulses and reactions of his mood are the players upon the new scene". Strether の観点から語られるこの物語を読むためには、読者は Strether の “vision” を読者がわけ持つのでなければならぬのであり、その長く、ゆるやかな過程の後を追って行くことは不可能であろう。“Stretcher's real situation, in fact, is not his open and visible situation, between the lady in New England and the young man in Paris; his grand adventure is not expressed in its incidents. These, as they are devised by the author, are secondary, they are the extension of the moral event that takes place in the breast of the ambassador, his change of mind. That is the very middle of the subject; it is a matter that lies solely between Strether himself and his vision of free world.” 作家 James は Strether については知り得るかぎり知っているのだけれども、作家の知識を少しでも使まいとするのである。作家は読者に何一つ盲目的に受けとってほしくないのである。ただ「見つめて、知って」(“to watch and learn”) ほしいのである。“The Ambassadors” は「一人の視点」(“one man's point of view”) から見られた物語りであって、その視点自体、読者が直面して見つめて組立てねばならない物語である。しかも、描写のなかにおいても、読者に話しかけて、その印象を語る人物が一人もいないのである。“The impression is enacting itself in the endless series of images that play over the outspread expanse of the man's mind and memory”. と述べ、“The Ambassadors” 論を進める。“And yet as a whole the book is all pictorial, and indirect impression received through Strether's intervening consciousness, beyond which the story never strays”. これで Lubbock の評論の要点を終り、次に Stephen Spender の見解をできるだけ簡潔に書きとめるこ

とにしよう。

“The Destructive Element”¹⁰⁾ を書いた Stephen Spender は、その評論書の約三分の一以上を James 論でうずめ、James が近代文学の発展に積極的な、しかも、未来的な連関をもつ重要性を認識し、James 文学に関しての見解を披瀝している。Spender は、James は初期の自然主義的な作品に比較して、創作の手段は、想像的であっても、心理的にはかえって、現代の現実に忠実なものであると述べている。そして後期の作品の代表の一つであるこの作品を「通俗な意味で傑作」(“The Ambassadors is, in a popular sense, James's mastrapicce”) であると評している。「黄金の盃」“The Golden Bowl” ほど「偉大」(“great”) な作品ではないが「読み易い美点」(“the merit of being more readable”) という見解をとっている。そして、この作品の「実体」(“the thing”), 即ち、あらゆる角度から眺める対象は “Paris” であるとして、この作品を解説して行くのである。そして、James Joyce の “Ulysses” が Henry James の “The Ambassadors” に驚く程類似していることを指摘する。Joyce の手法は James の手法の延長とも見ているのである。そして、James が常に作中人物の思考を逐っていく手法、即ち、各人物を他の人物を通して眺めたり、独自の流れを辿って、各人物が自分にだけ語る隠された思考を現わす手法を生み出したことの長所を述べるのである。James は Strether の思考を全く精神的なものにしておくことで、混沌に陥ちこもうとする独白の危険を避けていると述べているが、James 文学をよく見通した見解であるといえる。

V

James 文学に関しては（この作品に限らず）諸種の評論が書かれ、多くの批評書が出版されたが、それを読んでみると、いろいろの視点から、いろいろの立場から James 文学が考察され、その毀誉褒貶も単純ではないのである。この作品に関しても同様であって、前述した三人の批評家は James を褒める人達であるが、今しばらく、

James の欠点を “close-up” する例をあげてみよう。その一人は Yvor Winters¹¹⁾である。他の一人は H. G. Wells である。先ず Winters からであるが、Winters は James に対しては深い尊敬の念をいれているのであって、James をよく理解した上で批判を行うのである。Winters は James 自身をもっとも満足している作品 “The Ambassadors” を考察して、少くとも三つの難点があるというのである。今、ここに、その不満とする三つの点に関して、Winters 自身の評言をきくことにしよう。

“In the first place, it is only by stretching a point that we can bring ourselves to consider Chad Newsome at best a bone worth quite so much contention, worth the expenditure of quite so much moral heroism at Strether expends upon him. We can understand Chad’s hesitaion to return to the American business life of his period, but his alternative—that of a young man about Paris, however cultivated, — is scarcely the alternative of a Henry Adams. The central issue does not quite support the dramatics, as does, on the other hand, the central issue of each of the late masterpieces, *The Golden Bowl* and *The Wings of the Dove*. Furthermore, our final attitude toward Chad is unresolved, and thus resembles our final attitude toward Owen Gereth in *The Spoils of Poynton*; this may not be untrue to life, but it is untrue to art, for a work of art is an evaluation, a judgment, of an experience, and only is so far as it is that is it anything; and James in this one respect does not even judge the state of uncertainty, but as in *The Spoils of Poynton*, by merely leaves us uncertain. Shakespeare left us in no uncertainty about *Coriolanus*; Melville in none about Ahab or Benito Cereno; nor did either author lack subtlety. And finally, Strether’s ultimate scruple — to give up Maria Gostrey,

so that he may not seem in Woollett to have got anything for himself from a situation in which he will seem to his friends Woollett to have betrayed his trust, and in spite of the fact that Miss Gostrey could scarcely have been regarded as in any sense a bribe — this scruple, I say, impresses me very strongly as a sacrifice of morality to appearances: there might, conceivably, have been more christian humility in considering the feelings of Maria Gostrey and in letting his reputation in Woollett go by the board. The moral choice, here, appears to be of the same strained and unjustifiable type as that of Fleda Vetch, or as that of Isabel Archer.”¹²⁾

即ち、Winters のあげる難点を要約すると、第一は、Strether が道徳的英雄行為をしてやる程の価値ある人物であると考えられないという点である。それに、Chad がアメリカの実業家の生活に、いくら戻りたくなくとも、Paris の遊び人の生活（それがどのように洗煉されているとしても）Henry Adams のような人なら選ばぬ道である。従って、中心問題が “The Golden Bowl” や “The Wings of the Dove” の場合とちがって劇的になっていない。第二に Chad に対する読者の態度は “The Spoils of Poynton” の Owen Gereth に対する態度の場合と同様、定まらぬままに終わってしまうのである。これは芸術に対しては不実である。この作品の場合は不確かな状態を裁断せず読者を曖昧な気持ちにさせる。第三 Strether が最後に示す良心、即ち Woollett の人人の裏切り者だと思われる原因となった事態から、自分が得をしたわけではないことを表示するために、Maria Gostrey をあきらめるのは、体裁のために道徳を犠牲にしたという印象をあたえる。Maria Gostrey の感情を思いやって、Woollett での自分の評判の方は失われるにまかせるのが、キリスト教の美德にふさわしい。それをしなかった倫理的選択は Fleda Vetch や Isabel Archer の場合と同様、不自然で納得がいかないと言うのである。この見解に関する筆者の意見

は、最後に整理することにして、前述の H. G. Wells の非難の声をきいてみよう。

H. G. Wells は、James の “The Ambassadors” に限らず、文学論でも、小説作法でも James とは対照的な立場にあることが多いのである。James と Wells の関係や論争については（別の機会にゆずる）“Henry James and H. G. Wells by Edel and Gordon N. Ray”¹³⁾ が参考になる材料をあつかっているが、ここではこの作品に関する問題にのみしぼる。即ち、James が文章を凝って、大規模な situation のなかに主人公 Strether をおいていながら、小説として大したことは起らず、行動は少しも進展しない。自分の世話になった未亡人の一人息子 Chad を Paris から連れ戻す使命を果たしただけでも別に大したことではないのに、それさえできない。とこういうのが Wells の非難の要点なのである。つまり小説として大した事件が起らない。それに作中人物の「行動と熱情」の欠乏という点にあるというのであろう。

さて、いよいよ、筆者の見解を述べ、一応結論に向って急がねばならない時が来た。James の、この作品に対する難点指摘と非難は、形式(手法)や小説技術に関するものでなく、(勿論、「手法や技術」が内容と無関係である筈はないが)、ことごとく内容(主題)の問題で、しかも、作中人物の行動と生活態度とに関するものであるように思う。作中人物の生き方の問題であろうと思うのだが、James の作中人物の生き方については筆者は今日迄、多くの作品論中に論じて来たのである¹⁴⁾。

Strether が Vionnet 夫人に対して情熱が足りないのはおかしい。Strether の道徳主義(心の底に流れていると思われるピューリタニズムのため)に、わざわざされる消極的な受動的な行動のにえきらなき。この二点を先ず考えよう。この二点は、当然、これが、例えば、フランスの或るリアリスト達が描いたとすれば、Vionnet 夫人に男がしめす行動は、はるかに積極的になり、Strether とは、まるきり反対の動きとなったであろう。全く別種の小説が出現したであらう。通俗社会における人間は普通 Strether のような動

きはしないであろう。James の文学作品(作中の人物の動きと生き方)に非難を述べるもう一人の作家 Somerset Maugham の意見も Wells のとにかよった傾向を示すのである¹⁵⁾。人生の悲喜劇中の役者として自ら人生劇場に立たぬかぎりどうして人生を知ることができるであろう。というのが、おおまかだが、Maugham の意見である。Wells や Maugham が通俗の読者から受ける理由である。James は (James の生涯をみればわかるように¹⁶⁾) 窓辺に立って生活を観察し、更にもその上、友人達から聞いた話を素材として、それを基として小説を創り上げたのであるとも言える。従って、James の人物 (James の全作品の登場人物は 330 人を越えるので、ことごとくをこの種の人物とみなす早計な考察をしてはならない¹⁷⁾) の中主人公となるものには、普通の人間の眼からみると血肉をそなえた人間の行動と思えぬ人間が出現するのである。この種の人物は(道徳的意識の強さにもよるかも知れぬが、それと共に、それ以上に人生を美的に高潔に生きようとする。低俗な情緒に打ち勝つことを考える。高度な情緒の秤によって、低俗な情緒に打ち勝とうと行動をする。従って、James の描く人物の多くは人生を積極的に(或は通俗的に) enjoy しないのである。「正しくある」(“to be right”) 為に Vionnet 夫人とも別れる。だから甚だ受動的な生き方だと思う読者が多いだろう。この放棄 (“renouncement”) の生き方がいつも問題になる。しかし、必ずしもこれが、人生の敗北とは考えられないのである。何故、人生を enjoy する手段を放棄するのか。それは豊かな感受性のため誇を高くしようとするのである。自尊心の問題として Strether も現実の(或は通俗の)人生を放棄したのであろう。この点、甚だ倫理的である。美的であるが倫理的である。中年になって、Strether がはじめて恋愛にまきこまれるのであるが、Vionnet 夫人の真相を知った時に、夫人の熱情に対しても、自分の情熱を抑制して、それに対するに道徳的感情をもってするのである。Miss Gostrey も認めた道徳的至上命令であったわけである。

論じ続けてきたが、更に Winters の難点指摘と非難の諸点を考えてみよう。第一に、Chad が

道徳的英雄行為をしてやる程の人物でないのに Chad に対する思いやりの心情を終始ゆるめないのは前述のような生き方のためである。Chad の Paris の遊び人の生活は（それが、どの位洗練されているとしても）Henry Adams のような人なら選ばぬ道であるという意見はまちがいではないので、James 自身もそんな道は生涯選んではいけない。Chad のような人物を創ったに過ぎないのである。これは James の Imagination の豊衍さをあらわすものである。次に、“The Amdassadors” が “The Golden Bowl” や “The Wings of the Dove” に較べて、中心問題が劇的になっていないという見解には筆者は必ずしも反対するものではない。（この点に関しては他の機会に論評する）第二に Chad に対する読者の態度は “The Spoils of Poynton” の Owen Gereth に対する態度の場合と同様定まらぬままに終わってしまうというのである。これにも筆者は、必ずしも、反対しない。Chad という人間自体を曖昧な気持と曖昧な行動をする人間として描こうとするところから起こるものであろう。第三に、Maria Gostrey を Strether があきらめるのは体裁のために道徳を犠牲にしたという印象をあたえると Winters は言う。おそらく多くの読者も Strether の言動からそのような印象を受けるであろう。そして、Woollett の評判を問題にすべきではないというのが、読者の多くがとる解釈かも知れないと思われる。けれども、こういう立場におかれた場合、James のこの種の人物は、Fleda Vetch でも Isabel Archer でも、更には、Strether でも、皆このような行動をするのである。これは人生の生き方の問題で、“fair” に人生を生きようとする James の場合には、いつもこの曖昧さがつきまとうのである。これは作家の気質の問題と考えねばならぬようである。だから、こういう曖昧さを好まぬなら、James を読まない方がよいことになる。この点は、確かに James 文学の褒貶の一分岐点であるといえるであろう。

James の小説には、総じて、事件と行動が活潑に展開しない。これが James の対照的な立場にある批評家や読者の非難であるが、この作品についての考え方にも同様のことがおこる。ところが、

Wells が事件と考えることは、人間生活の外面的事件であり変化であるが、James が考えるように、人間の内面における本質的な変化 (Strether の場合) も、人間の外面的変化に劣ることなく、或る場合には、人生の生き方として意義深いことがあるのである。一般の読者のうちには Wells と同様、この小説の主題は、Strether が “an Ambassador” として Chad をアメリカへ連れ戻す使命を果すことだと考えるものが多かろうと思う。だが、James の主題は、この論述の最初においてもふれたように、青春をとり逃がした主人公が、「人生という汽車に乗りおくれ、遠ざかる汽笛を淋しく聞きながら」ヨーロッパの Paris という主人公とは異った文化と伝統のなかで、青春がとりもどせるかというのであった。Paris の美と法悦と莊嚴に魅せられた Strether は、ヨーロッパの文化の美に魅せられて人間的価値をも悟ることができるようになったのであり、それはアメリカとヨーロッパの両文化の総合を通して、より次の人生への探求を経験したことになるのである。従って初期の “The American”¹⁸⁾ つづいて “The Portrait of a Lady” 及びその他、所謂、“International Situation” と言われる小説と同様、この作品も、“International Situation” の小説であることにちがいないが、そして、ヨーロッパとアメリカの対照をふくみ、想像と現実との対照が描かれているにちがいないが、その対照は、James の歴史的意識に貫かれているものであり、同時に単なる国際的問題の小説ではなく、又、単に人生の後年において、Paris の文化に接したアメリカ人の物語でなく、いかなる時においても、いかなる場所においても微妙に反映する他国のモラルを通して、自己の道を感じとる人間の研究であり、又、高度な情緒の秤によって、低俗な情緒に打ち勝つ人間の物語り、内面の人間の物語りであって、それを実に洗練された文体 (“a disciplined, an intellectual style”. “the style of a very great writer, skilled by long diligence to convey the insights of a gifted observer”) で書かれた、豊衍な想像力と繊細な感受性と技術とが生む、説話の芸術なのである。

(1964. 12. 15)

〔注〕

- 1) The Novels and Tales of Henry James, The New York Edition. Twenty-six Volumes. 1907—1917 (1962年新版が Charles Scribner's Sons から発刊された)
- 2) “The Tragedy of Manners — Moral Drama in Later Novels of Henry James” by Frederick C. Crews. Undergraduate Prize Essays : Yale Univerersity 版 p. 31.
- 3) “The Notebooks of Henry James.” George Braziller, 1955. p. 31.
- 4) “The Ambassadors” は四つの版がある。(筆者の所持しているもの)(1) The New York Edition 中のもの(2) Edited with an Introduction and Notes by Leon Edel. New York University のもの(3) With Introduction by Martin W. Sampson and John C. Gerber. Harper and Brothers Publishers のもの(4) Introduction by Frank Swinerton. Everyman's Library 中のものである。この論文中の引用は最後の(4)のもの(読者の便宜をはかって)からである。
- 5) 拙稿 Henry James 作 “The Spoils of Poynton” 論——人生と芸術・いかに生きるか——参照(関西学院大学「社会学部紀要」第7号)
- 6) “The Free Spirit — A Study of Liberal Humanism in the Nobels of George Eliot, Henry James, E.M. Forster, Virginia Woolf, Angus Wilson.” by C. B. Cox. 中の James 論参照。
- 7) 拙稿「アメリカ人」をどのように読むか——初期 H. James のロマン主義と清教主義(関西学院大学「論攷」第7号)
拙稿 Henry James 国際テーマ小説の問題点——1871—1881——年間の作品と作風(「論攷」第8号)
拙稿 Henry James と Mary (Minny) Temple — H. James の生涯と作風——(「英米文学」関西学院大学 Vol. VI, No. 1)
拙稿 Henry James 作 “Watch and Ward” 論——この作品の性格と sexuality の問題——(「論攷」第10号)
拙稿 Henry James をいかに読むか——英米両文

学史にまたがる巨匠の位置とその文学について——(「社会学部紀要」第9・10号)

拙稿 H. James 作 “The Jolly Corner” 論——意識と潜在意識をさぐるもの——(「社会学部紀要」第11号)

拙稿 James 文学とその批評——戦前における James 批評の動向と James 褒貶の分岐点——(「英米文学」Vol. IX, No. 1)

- 8) “The Method of Henry James” by Joseph Warren Beach. Philadelphia Albert Saifer : Publisher, 1954.
 - 9) “The Craft of Fiction” by Percy Lubbock. Jonathan Cape Thirty Bedford Square, London. 1955.
 - 10) “The Destructive Element — A Study of Modern Writers and Beliefs” by Stephen Spender. Jonathan Cape, London.
 - 11) “In Defense of Reason” by Yvør Winters. A Swallow Press Book, The University of Denver Press.
 - 12) 11) と同書。pp. 334—335.
 - 13) “Henry James and H. G. Wells — A Record of their Friendship, their Debate on the Art of Fiction, and their Quarrel” — Edited with an Introduction by Leon Edel & Gordon N. Ray. Rupert Hart-Davis, London. 1958.
 - 14) 注7) の拙稿
 - 15) 拙稿 Henry James 作 “The Spoils of Poynton” 論——人生と芸術・いかに生きるか——(「社会学部紀要」第7号) 参照
 - 16) 拙稿 Henry James 1843—1881—James (前期) の生涯と作風, 参照
拙稿 Henry James と Mary (Minny) Temple — H. James の生涯と作風——(「英米文学」Vol. VI, No. 1.) 参照
 - 17) 拙稿 James 文学と批評——戦前における James 批評の動向と James 褒貶の分岐点——(「英米文学」Vol. IX, No. 1.) 参照
 - 18) 拙稿「アメリカ人」をどのように読むか——初期 H. James のロマン主義と清教主義——(「論攷」第7号) 参照
- 猶 今回のこの“The Ambassadors”論では、筆者の見解を充分述べていないので再び別の機会に “The Ambassadors” 論を発表することにしたい。